目次

序……久松　潜一

研究篇

光源氏の発心……阿部　秋生……一

源氏物語の創造と紫式部日記……藤村　潔……三
—寛弘五年を中心として—

源氏物語の構造と表現……室伏　信助……七
—「賢木」巻をめぐって—

源氏物語の主題と方法……清水　好子……一〇三
—若菜上・下巻について—

並びの巻攷……大朝　雄二……一三七

源氏物語と霊験譚の交渉……柳井　滋……一八一

目次

夕顔とその前後……上坂　信男……三一七
源氏物語事項索引の試み……玉上　琢弥……二五三
資料篇
源氏物語古註　葵巻　二巻
解題……松田　武夫……三七一
凡例……二九一
葵巻（前半）　七海本……二九三
葵巻（後半）　吉田本……三五〇

光源氏の発心

阿部秋生

一

『源氏物語』の主人公光源氏は結局出家する。その出家にいたる道心の推移については、先人がさまざまな形で論及してゐるが、中でも、岡崎義恵博士が「源氏物語の研究―光源氏の道心について―」（改造社版「日本文学講座」物語小説篇上、昭和九年二月刊）[註]で詳細にこれを跡づけてゐる。あるいひ方をすれば、岡崎博士のこの論考は、その後この問題について考へる人々の據り所として扱はれてきたものであるといつてもいい。また、誰かがもう一度採り上げて跡づけてみても、それほど大きな差のある結論が出て来るはずもない。

（註）岡崎博士のこの論文は、その後、『日本文芸学』（昭和十年十二月十日、岩波書店刊）の中に「光源氏の道心」として収められた。その巻末に解題がある。さらに戦後『源氏物語の美』（岡崎義恵著作集5）（昭和三十五年七月二十日、宝文館刊）に、多少加筆修正して収められた。加筆修正の時期は、昭和三十四年八月であると、その巻末の解説にある。文芸学的研究を主張された岡崎博士の論考の中では、些か異質のもののやうにも思はれるが、また一方、たしかに文芸学的研究の特徴をもつてゐる論考である。従つて、『源氏物語』の時代や著者に密着して考へてみようとする人にとつては、もう一歩踏みこんでほしいものだ、と思ふところもある。「これはこの頃の研究家の往々取上げる観方のように、作者（恐らく紫式部）の心境の推移ということを意味するのではなく、あくまでも物語に描き出された人物である光源氏の内面の進行を意味するのである。」（『源氏物語の美』五六～七頁）といふ。ここにも博士の方法上の主張は明確にされてゐるといひうるだらう。

さういふ問題をここでもう一度取扱つてみようとするのは、詮じつめてみると、全く私個人の関心によるものである。もう一度、自分の手で、岡崎博士の後塵を拝しつつでも、跡づけてみようといふことである。よくもあしくも、さうすることが、私の方法でもあるのだ。